

韓半島の初期青銅器文化と 初期弥生文化 突帯文土器と集落を中心に

Relationship between the Early Bronze Culture of
the Korean Peninsula and the Early Yayoi Culture :
From the Viewpoints of Tottaimon Pottery and Settlements

李 亨源

YI Hyungwon

はじめに

- ① 突帯文土器からの視点
- ② 集落構成要素からの視点
- ③ 集落構造からの視点

おわりに

【論文要旨】

本稿は、突帯文土器と集落を使って韓半島の青銅器文化と初期弥生文化との関係について検討したものである。

最近の発掘資料を整理・検討した結果、韓半島の突帯文土器は青銅器時代早期から前期後半（末）まで存続した可能性が高いことがわかった。その結果、両地域の突帯文土器の年代差はほとんどなくなりつつある。したがって、突帯文土器文化は東アジア的な視野のもとで理解すべきであり、中国東北地域から韓半島の西北韓、東北韓地域、そして南部地域と日本列島に至る広範囲の地域において突帯文土器を伴う文化が伝播したことを想定する必要がある。

集落を構成する要素のうち、これまであまり注目してこなかった地上建物のうち、両地域に見られる棟持柱建物、貯蔵穴、井戸を検討したところ、韓半島の青銅器文化と弥生文化との間には密接な関連があることを指摘した。

集落構造では韓半島南部の網谷里遺跡と北部九州の江辻遺跡との共通点と相違点を検討し、とくに網谷里遺跡から出土した九州北部系突帯文土器の意味するものについて考えた。さらに青銅器中期文化において大規模貯蔵穴群が出現する背景には社会変化があること、初期弥生文化においてやや遅れて出現する原因を、水田稲作を伝えた初期の渡海集団の規模が小さく、社会経済的な水準あるいは階層が比較的低かったことに求めた。弥生早期に巨大な支石墓や区画墓のような大規模の記念物や、首長の権威や権力を象徴する青銅器が見られないのも同じ理由である。これは渡海の原因と背景を、韓半島の首長社会の情勢変化と気候環境の悪化に求める最近の研究結果とも符合している。

【キーワード】 突帯文土器、集落、青銅器時代、弥生時代、渡海人、渡来人

はじめに

韓半島青銅器時代の農耕文化が日本列島の弥生文化形成に大きな影響を与えたことはさまざまな考古学的な発掘と研究成果からすでに明らかである。灌漑施設を備えた水田稲作に代表される生産経済的な側面をはじめとして、松菊里型住居や環濠集落、支石墓を含む墓制、煮沸容器と貯蔵容器に使用した土器、石製あるいは木製の農具、磨製石剣・石鏃のような武器や武装具にいたるまで、生と死の世界、全般にわたっている。

韓半島の水田稲作文化が弥生文化の祖型である点については、日本の考古学界にも意見の違はないが、その実態については1950年代から2つの考え方がある〔藤尾2009〕。1つは縄文人が必要とするもののみを選択的に受容して弥生文化が成立したという縄文人主体説。もう1つは渡来人⁽¹⁾が指導的な役割を果たすことによって弥生文化が成立したという渡来人主体説である。

本稿はこのような研究状況を念頭におきながら、弥生文化と青銅器文化との関連を研究することに役立つ韓半島における最近の発掘成果を紹介し、これらをもつ意味について私見を提示したい。検討の対象とするのは突帯文土器と集落の2つである。

①……………突帯文土器からの視点

韓半島の突帯文土器⁽²⁾は、青銅器時代早期の指標土器として前期まで存続する〔安在皓2000、千羨幸2005〕。西日本の突帯文土器は、縄文晩期後半の指標土器として位置づけられていたが、この土器に灌漑式水田稲作が伴うことが明らかになった1980年代以降、弥生早期に再設定された経緯がある〔藤尾2009〕。両地域に存在する突帯文土器の関係については、関連を積極的に認める研究者〔李弘鐘1988・2006、安在皓2000、千羨幸2008・2009〕と、否定する研究者〔藤尾2002、深澤・庄田2009〕がある。否定する最大の理由は、両地域の突帯文土器文化が基盤とする生業が、韓半島では畑(田)作農耕、九州北部では水田稲作と異なっていることと年代差があまりにも大きいことである⁽⁴⁾。このように両地域の突帯文土器をめぐる考え方に違いがみられるなかで、韓半島の突帯文土器を検討して、弥生早期の突帯文土器との関連について検討する。

(1) 韓半島の突帯文土器

韓半島の突帯文土器は1990年代後半までは無文土器研究のなかではあまり注目されてこなかった。もちろん最大の理由は資料があまりにも少なかったからである。刻目突帯文土器⁽⁵⁾は、口縁端部直下の胴部上位に突帯を貼り付け、突帯の上に直線・斜線・X字文・鋸歯文などの文様を刻んだ青銅器時代初期の特徴的な無文土器である。忠北堤川^{ファンツリ}黄石里遺跡の調査で初めて知られることになった突帯文土器は、李弘鐘が韓半島南部と九州の刻目突帯文土器を比較・検討してから関心をひくようになった〔李弘鐘⁽⁵⁾1988〕。李弘鐘は堤川黄石里の包含層出土の刻目突帯文土器を分析した結果、弥生早期から弥生前期にかけての九州北部水田稲作社会で使用されていた、いわゆる夜臼式土器と形態が類似していることを根拠に、韓半島の刻目突帯文土器文化が九州北部に初期水田稲作を伝え

たと主張したのである。

その後、京畿道河南漢沙里遺跡や慶尚南道南江ダム水没地区の先史遺跡などで刻目突帯文土器を多数出土する住居址が調査されたことで、この土器と関連するより詳しい文化全般についての理解が可能になった。安在皓は正方形の平面プランに石床囲石式炉址をもつ漢沙里式住居址から出土した刻目突帯文土器を、青銅器時代前期（可楽洞式、礫三洞式、欣岩里式土器）に先行する早期の土器として設定する一方で、慶南晋州上村里遺跡や同泗川本村里遺跡で見られるような、駅三洞式あるいは欣岩里式土器と突帯文土器が共伴する遺跡は、前期後半に比定できるという理解を示した〔安在皓 2000〕。

筆者は漢江流域の漢沙里遺跡をはじめ、南江流域の先史遺跡などで確認された多くの遺跡にみられる特徴は、安在皓が提示した住居構造や遺物相と同一のパターンを示すことを認めた上で、これらを漢沙里類型と名づけた。すなわち、漢沙里類型は次のように意義できる。“住居構造は漢沙里式住居址（方形あるいは長方形のプランに板石敷囲石式炉を設置）、土器は漢沙里式土器（刻目突帯文土器）、石器は三角湾入石鏃や半月形石庖丁、扁平石斧などを指標とする”〔李亨源 2001・2002〕。

青銅器時代早期の指標土器である刻目突帯文土器、すなわち、漢沙里式土器は依然として資料があまりにも少ないため細分できない状況にあるが〔千羨幸2005〕、漢沙里遺跡11号住居から出土した突帯文土器は、新石器時代最終末の櫛目文丸底土器と共伴するためもっとも古く位置づけられる（図1）〔安在皓2000〕。櫛目文の丸底土器内面に付着していた炭化物の¹⁴C年代は 3360 ± 40 BPであり、較正年代では前17～前15世紀に位置づけられる。南部地域でも全羅北道淳昌の院村遺跡や慶尚南道晋州大坪里玉房5地区D-2号住居址（ 3230 ± 50 BP, 3180 ± 80 BP）、晋州上村里D-2号住居址（ 3030 ± 50 BP）（図2）などが、南部地域のもっとも古い突帯文土器と考えられる。

一方、突帯文土器が出土する遺跡のなかには、青銅器時代前期に比定される資料が数多く存在する。可楽洞式の二重口縁あるいは二重口縁短斜線文土器、駅三洞式の孔列文土器が共伴するのがその代表で、筆者はこれを前期に属するものと判断している。これらの資料の中で¹⁴C年代測定が行われた一部を列挙しよう。

- 江原旌善アウラジ 1号：刻目突帯文土器+可楽洞式土器（二重口縁短斜線文）、¹⁴C年代 3010 ± 60 BP（図1）
- 江原洪川 外三浦里 3号：節状突帯文土器+瘤状突帯文土器+（孔列文土器）、¹⁴C年代 3080 ± 60 BP（図1）
- 江原洪川 外三浦里 5号：刻目突帯文土器+節状突帯文土器+瘤状突帯文土器+可楽洞式土器（二重口縁鋸歯文）、二段柄式石剣、¹⁴C年代 3120 ± 80 BP（図1）
- 京畿加平 蓮下里1号：刻目突帯文土器+節状突帯文土器、三角湾入石鏃、一段莖石鏃、¹⁴C年代 3090 ± 60 BP, 3070 ± 50 BP, 3030 ± 60 BP, 3000 ± 60 BP, 2810 ± 60 BP（図1）
- 京畿加平 蓮下里13号：刻目突帯文土器+瘤状突帯口唇刻目文土器、有血溝石剣
- 慶南晋州 大坪里 漁隠1地区77号：節状突帯文土器+可楽洞式土器（二重口縁鋸歯文）
- 慶南晋州 大坪里 漁隠1地区 104号：可楽洞式土器 共伴、¹⁴C年年代 2850 ± 60 BP（コム）、 2830 ± 60 BP（アワ）、 2840 ± 60 BP（アワ）
- 慶南晋州 上村里 D地区 10号：刻目突帯文土器+孔列土器、¹⁴C年代 3010 ± 50 BP（図2）

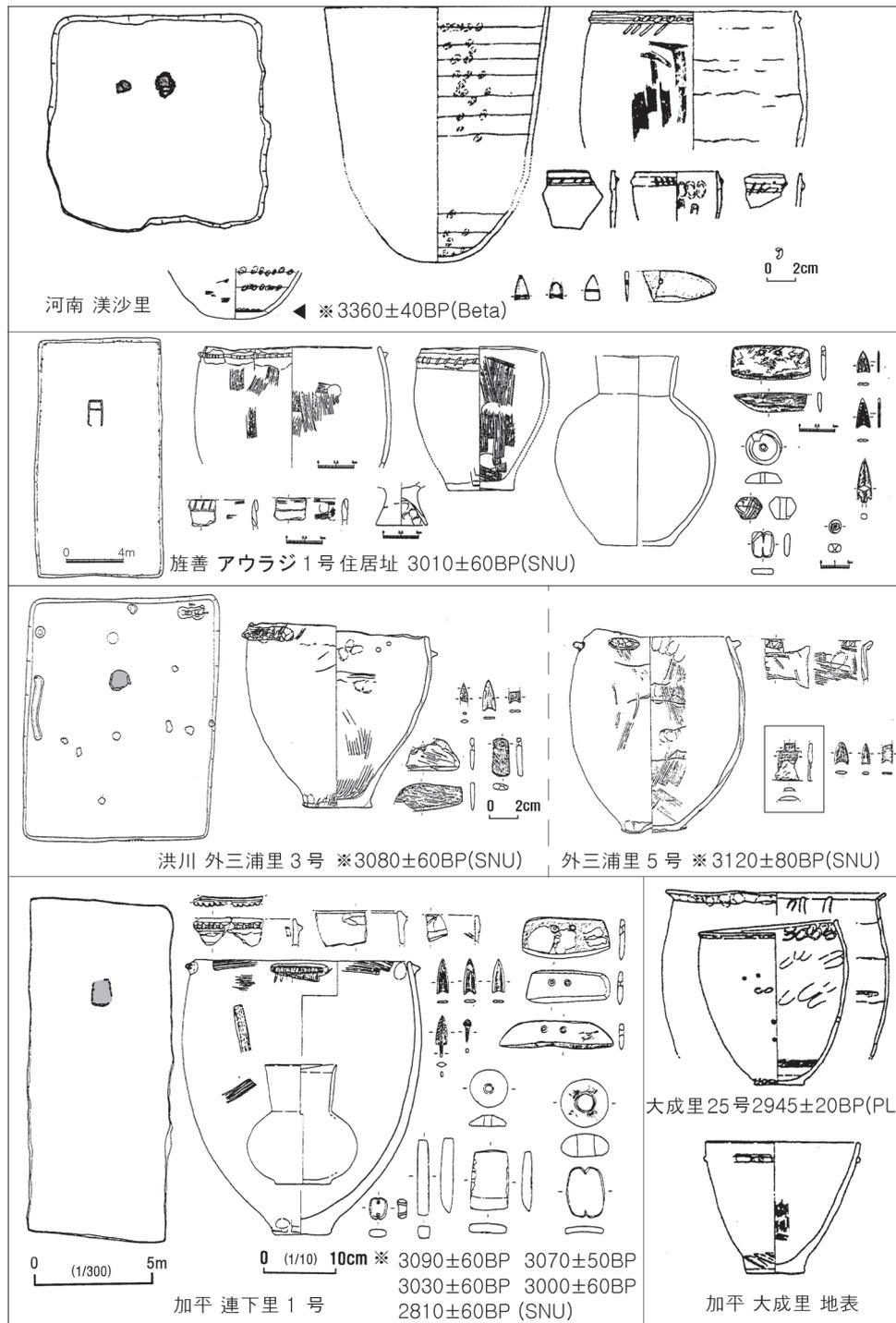


図1 韓半島中部地域の青銅器時代早期～前期前葉の突帯文土器

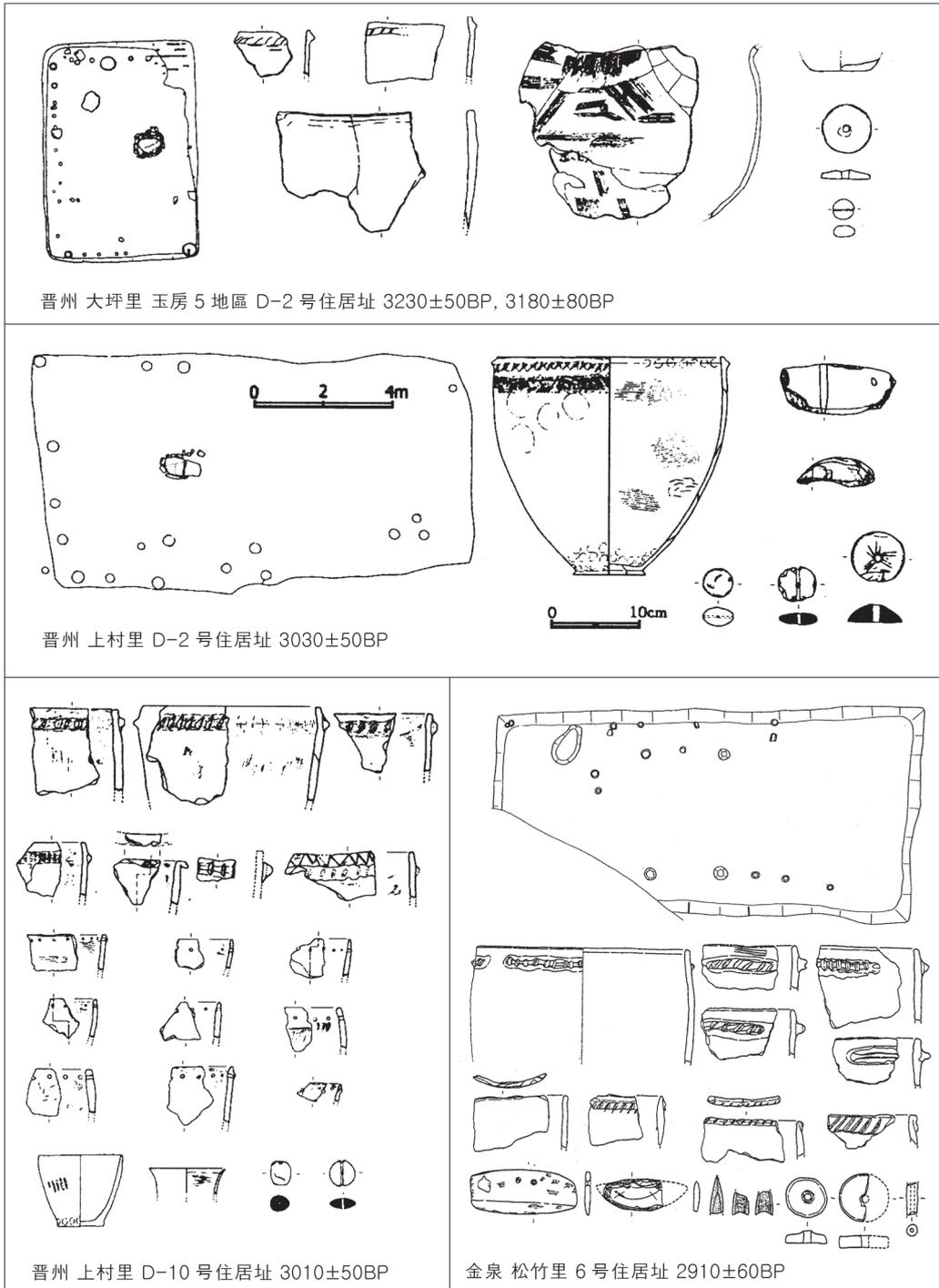


図 2 韓半島南部地域の青銅器時代早期～前期前葉の突帯文土器 (1)



図3 韓半島南部地域の青銅器時代早期～前期前葉の突帯文土器 (2)

- 慶南晋州 平居洞 3-1地区 5号：刻目突帯文土器+短斜線孔列文土器+孔列文土器，¹⁴C年代 2945 ± 25BP, 2935 ± 25 BP (図3)
- 慶北金泉 松竹里 1段階：刻目突帯文土器+節状突帯文土器+可樂洞式土器，¹⁴C年代 6号 2910 ± 60 BP (図2)

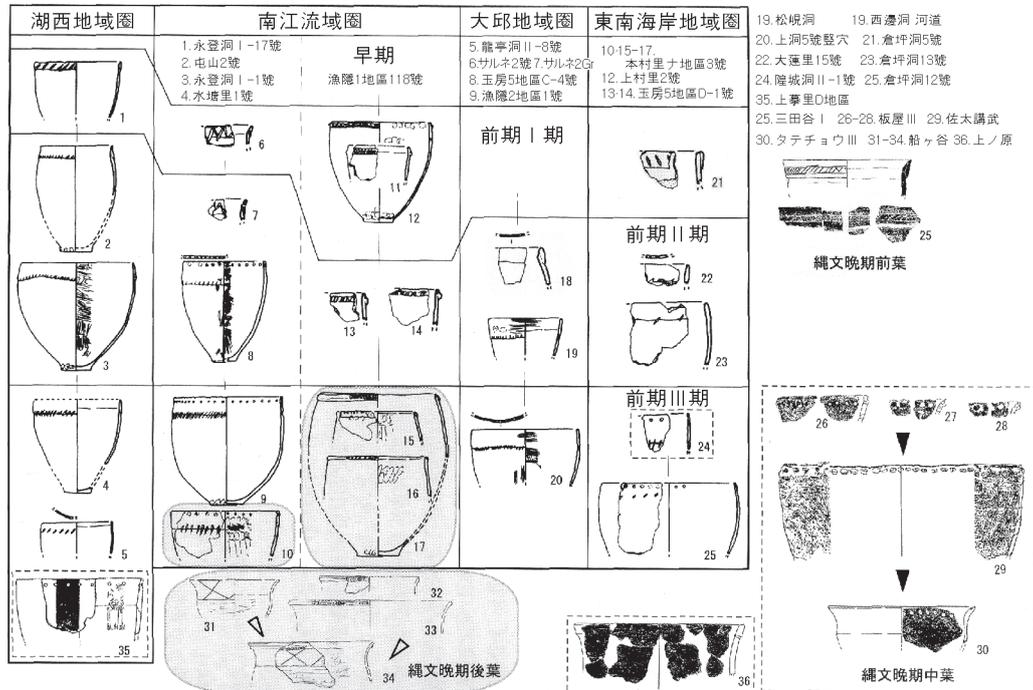
上記した資料は大部分が前期前葉に相当する。これに続く前期中葉は益山永登洞 I-3 号住居址の節状突帯文土器に可樂洞式土器と口唇刻目文土器が共伴し、錦山水塘里遺跡の 6 号住居址 (2830 ± 50 BP) の節状突帯文土器には口唇刻目文土器が共伴する [李亨源 2009]。

一方、前期後葉の突帯文土器として、安在皓は泗川本村里遺跡ナ 3 号住居址において欣岩里式土器 (二重口縁短斜線孔列文) と共伴した突帯文土器をあげ根拠とした [安在皓 2000]。藤尾 [2002]、千羨幸 [2005・2008] も同様な立場をとっている。その中で安在皓と千羨幸は本村里遺跡のナ 3 号住居址の編年の位置に基づき、韓半島の突帯文土器が日本列島の突帯文土器に影響を与えたと主張するようになった (図 4-上)。

この本村里のナ 3 号住居址の刻目突帯文土器と欣岩里式土器の共伴関係を認めない見解もある。金炳燮 [2009] と庄田慎矢 [2010] は、本村里遺跡の正式発掘報告書 [趙榮濟他 2011] において、二重口縁短斜線孔列文深鉢形土器をはじめ、口唇刻目孔列文土器、孔列文土器など前期の土器は、ナ 3 号住居址の上部堆積層から出土したため、突帯文土器とは共存しなかったと報告されたことを受けたものである。したがって、本村里遺跡のナ 3 号住居址出土の突帯文土器の時期は前期前半に編年されるという。もちろん報告者の見解を信頼すべきであるが、筆者はナ 3 号住居址から一段釜式石鏃が 3 点出土したことや、前期後半の住居址であるナ 6 号・8 号などと並んで配置されている点を考慮する必要があると考える。

さらに、今まで説明した突帯文土器よりも時期が下る可能性のある資料がある。慶北慶州金文里遺跡の下層 8 号住居址の突帯文土器である (図 5-上)。8 号住居址からは刻目突帯文土器と口唇刻目文土器、赤色磨研土器などの土器類とともに、一段柄式磨製石剣と船形石器 (舟形石器) が出土した [朴光烈他 2006]。突帯文土器の型式変遷が明らかにされていないため細分が難しいのは事実であるが、金文里の突帯文土器と共伴した資料のなかに、中期松菊里文化段階に盛行した一段柄式石剣や、石槍と石鏃の製作の中間素材である船形石器が存在することを考慮すると、前期後葉から中期初頭のあいだに編年される可能性が高いと考えられる。ただ、突帯文土器文化の時間的な流れを勘案すれば、前期末程度に位置つけてもおかしくないと考えられる。

最後に青銅器時代中期の馬山網谷里遺跡から出土した突帯文土器が注目される (図 5-下)。環濠から赤色磨研壺、口唇刻目土器、内湾甕などと共に出土し、口縁部が欠けていることを除けば全体の形状はよく残っている方である。胴体上位に明瞭な屈曲があり、そこに刻目突帯文が施されている。報告書によると、胎土と外径接合などの成形方法および器面調整などは無文土器と共通するが、器形的な特徴は、九州西部地域の弥生早期の屈曲形 2 条突帯文土器に類似している⁽⁶⁾。内径接合で粘土帯を積み上げる弥生早期の突帯文土器とは異なり、無文土器に一般的な外径接合で積み上げる点、網谷里遺跡から出土した他の無文土器と同一の胎土および調整法を用いていることから、網谷里遺跡の環濠から出土した突帯文土器は、弥生早期の屈曲形 2 条突帯文土器を模倣して韓半島南部で作られた土器と考えられている [金炳燮 2009]。端野晋平も網谷里出土の突帯文土器が九州西部の突



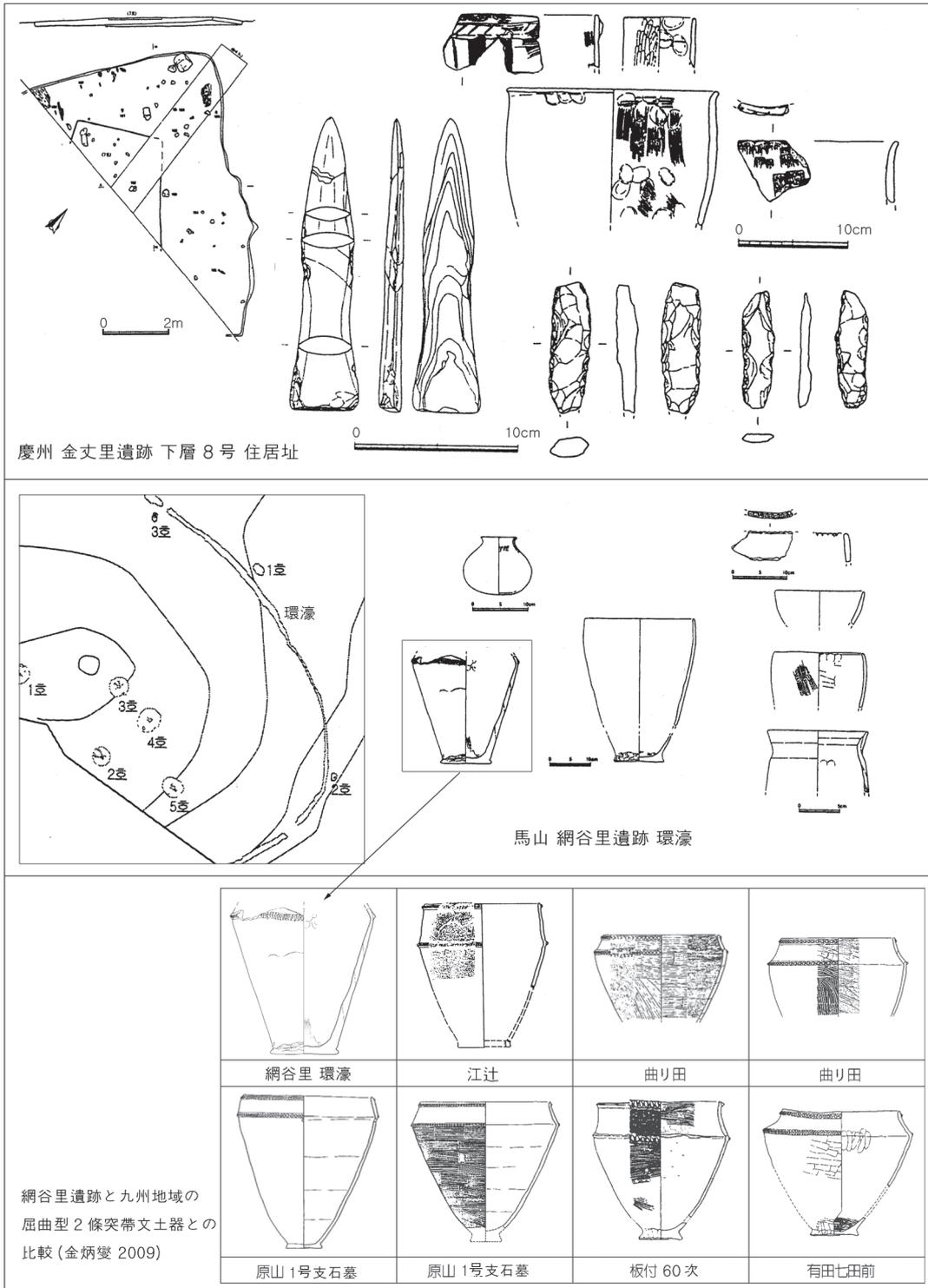


図5 韓半島南部地域における前期後葉(末)~中期の突帯文土器と北部九州の屈曲型2條突帯文土器

帯文土器と類似するが、製作技法や胎土、色調などからみて、九州からの搬入品ではなく九州に一定期間の滞在したか、あるいは交流を通じて突帯文土器を知った無文土器人による模倣品である可能性が高いとみている [端野 2010]。筆者も金炳燮や端野晋平の見解に賛同する。

(2) 韓半島の突帯文土器と西日本の突帯文土器との関係

前述したように、1988年に李弘鐘が初めて提起した韓半島突帯文土器の祖型説は、当時こそ注目されなかったが、2000年代に入って安在皓 [2000]、李弘鐘 [2006]、千羨幸 [2008] があいついで主張される傾向がある。

韓国の研究者と違って日本の研究者は、弥生早期が青銅器時代中期の松菊里類型（先松菊里類型含む）段階の水田稲作文化と密接な関係をもつという考えが支配的で、弥生早期の突帯文土器である夜白Ⅰ式土器は、縄文土器から内部発展したものと考えていたので、韓半島の突帯文土器にはあまり関心を持っていなかったと考えられる。だが、唯一関心を持っていた藤尾が韓半島の突帯文土器の整理をしたことはあるが [藤尾 2002]、先述したような理由から関連性を否定してきたのである⁽⁷⁾。

現状を打開したのは千羨幸である。千羨幸は韓日両地域の突帯文土器の炭素14年代と土器の形態を分析して以下のような結論を導き出した。すなわち瀬戸内西半部の縄文土器が、青銅器時代前期Ⅲ期に属する韓半島南部、南江流域圏の突帯文土器文化（刻目突帯・沈線文）を受け入れ、西日本の突帯文土器を成立させたと [千羨幸 2008]。しかし、両地域の突帯文土器に見られる共通点は装飾面にとどまり、器種構成、器形、調整などには及んでいないため、韓半島から直接多くの人びとが渡海して西日本の突帯文土器文化を成立させたのではなく、少数の人たちによって文様のような視覚的な情報だけが伝えられたか、縄文人が刻目突帯と沈線文のような文様だけを模倣した可能性が高いと考えた [千羨幸 2008]。

実はこれと似たような状況は、韓半島における突帯文土器の成立過程でもみることができる。漢沙里類型は中国東北地域をはじめ、鴨緑江流域と清川江流域に分布する住居構造、土器、石器、紡錘車などが韓半島南部へ拡散して成立したものである [安在皓 2000、李亨源 2002、朴淳發 2003、千羨幸 2005]。住居構造および遺物の組み合わせからみて人びとの移住が背景にある可能性が高いが、突帯文が施された器種と器形には両地域のあいだに違いが見られる。

要約すると、中国東北地域や西北韓地域の突帯文土器文化が韓半島南部地域へ南下する時には、住居構造や石器組成などを維持しつつ、土器相には多少の変化がみられることに対し、韓半島南部地域から西日本への影響は突帯文の文様に限定されていることである。¹⁴C年代からみると、およそ前15世紀から前10世紀にかけての期間には、中国東北地域を含んだ韓半島西北韓と東北韓、南部地域へ突帯文土器が拡散する様相を確認できる。この過程で西日本へも伝わったと理解される（表1参照）。突帯文土器文化を東アジア的な広い視点でみるが必要な時である。さらに、日本の突帯文土器文化が韓半島とは異なり、比較的遅くまで存続したのは日本列島の地理的な位置や文化的な特徴を考慮すべきと考える。突帯文土器文化と松菊里文化はある程度の時間差をおいて西日本に伝わったが、突帯文土器が文様のモチーフに限定された反面、松菊里文化は文化全般が拡散したと考えられる。特に、韓半島では畑作を生産基盤としていた突帯文土器文化と、水田稲作を生産基盤

青銅器時代中期の松菊里類型の時期になると、初期弥生文化との深い関連性がみられるようになるので、環濠集落や松菊里住居へ関心があつまるとなる。ここではこの分野における今後の議論を進展させるために、これまであまり比較・検討が行われてこなかった棟持柱建物と貯蔵穴、井戸について考察する。

(1) 地上建物(堀立柱建物)

福岡県江辻遺跡で確認された弥生早期の地上建物(堀立柱建物)は、松菊里文化との関連がとりあげられたことがある[武末 2002, 小澤 2006]。今回、一般的な地上建物以外に棟持柱地上建物を検討の対象にしたのは、韓半島の棟持柱地上建物に関する研究があまりないためである。

保寧寛倉里遺跡^{グァンチャンリ}[李弘鐘 2001]や公州新影里遺跡[吳圭珍 2005]で確認された地上建物は一般的な地上建物とは異なり、梁部(短軸側)に突出した棟持柱を持っている独特な形態をしている点である(図7)。このような形態の地上建物址は日本では多くの事例が知られており、多くの研究が行われている。この特徴的な棟持柱建物については象徴的な性格を持たせようとする傾向が⁽⁸⁾つよい[大阪府立弥生文化博物館 2002]。つまり、日本の独立棟持柱あるいは近接棟持柱建物は主に祭祀的な性格が強い祭殿として理解されている。その根拠は数多く発掘された堀立柱建物の中で、この形式はごく一部に過ぎない点である。また、8世紀代に創立されたと考えられる伊勢神宮正殿と柱の配置が同一であり、奈良時代以後は神殿形式の一つとして現在まで命脈を保ってきたためである。さらに、弥生時代や古墳時代にもこの形式の建物が集落の中心に位置すること、銅鐸や土器にシャーマンとみられる人物やシカ、船などと共に装飾された高床建物として描かれる例が多いことなどからみて、弥生時代以後の独立(近接)棟持柱建物は儀式や儀礼と関連した象徴的な建物として把握されていると考えられる[小笠原好彦 1990, 宮本長二郎 1996, 清水真一 1997, 広瀬和雄 1998, 設楽博己 2009](図6)。特に広瀬和雄[1998]はこれを農耕祭祀と結び付けて、この建物が普通は稲を収納する高床倉庫として利用され、春の播種から秋の収穫までの期間のみを神殿として利用したという仮説を提示したこともあるし、清水真一は倉庫の機能を兼ねた拝殿とみている[清水 1997]。

また、設楽博己は弥生時代の独立棟持柱建物が住居域に位置する場合と墓域に位置する場合に分けて解釈を行っている[設楽 2009]。前者はまた、堅穴住居と混在するものと特定場所に造られるもの、区画施設を持つものなどに細分し、これを時間の経過を加味しながら、共同体的な施設から首長居館施設への変貌すると考えた。前述した弥生絵画に描かれた独立棟持柱建物の特殊な装飾、堅穴などから出土する遺物などからみて、このような建物が祭殿の役割を果たしていたと推定した。さらに、墓域を伴う独立棟持柱建物がもつ祭儀の中身の一部を祖霊祭祀と連動させた。

上記のような象徴性を付与する見解について否定的な見解[佐原 1998]もある反面、それが持っている解釈上の問題もやはり考古学的に究明するには困難な分野であるため、今後の議論が期待される。

では韓半島での独立(近接)棟持柱地上建物の特徴をみてみよう。現在、青銅器時代中期の保寧寛倉里遺跡1棟、扶餘松菊里遺跡1棟、公州新影里遺跡1棟、晋州大坪里玉房1地区、泗川梨琴洞遺跡などにその存在が知られている。そして、河南漢沙里遺跡には原三国段階に比定される地上建物7棟、最後に三国時代の百濟泗泚期に属する扶餘軍守里遺跡から1棟が発掘されている。保寧寛

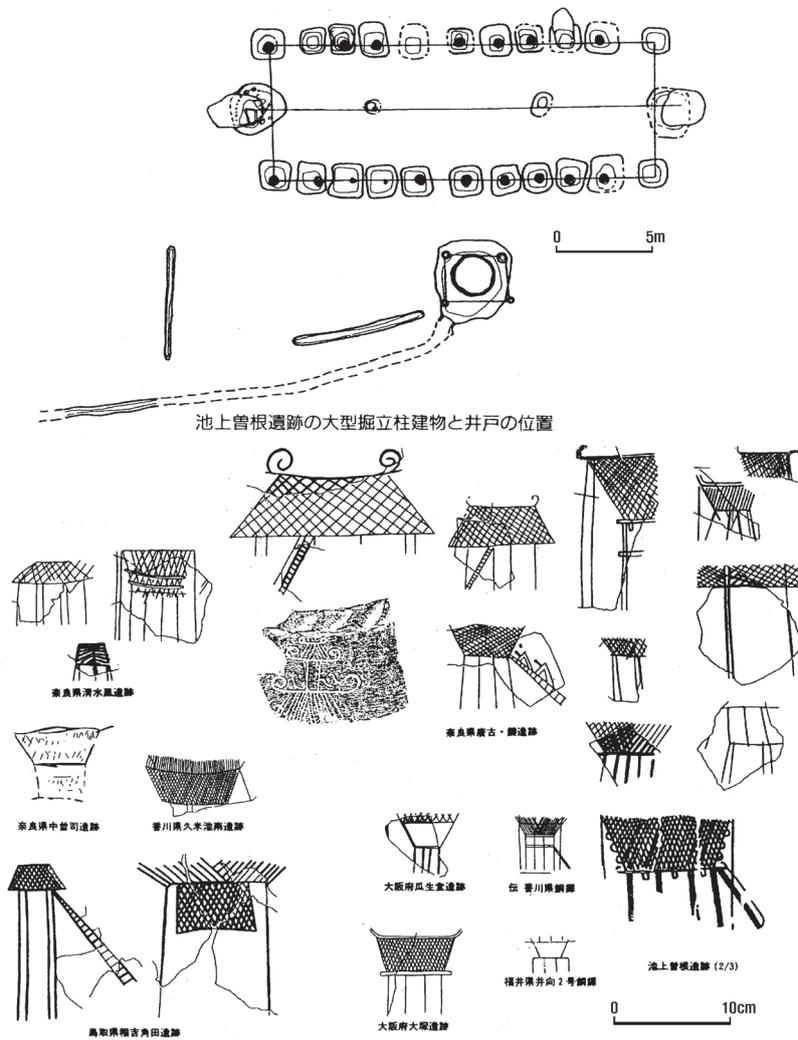


図6 大阪府池上曾根遺跡の大形棟持柱建物と弥生時代の建物絵画・銅鐸に表現された棟持柱建物〔広瀬和雄編 1988〕を加工

倉里の独立棟持柱建物址を、他の地上建物や住居との位置関係でみると、数棟の住居と一つのグループをなしているようにみえる。しかし、集落内で棟持柱を持つ唯一の建物が集落東側の境界地点の比較的よい立地に単独で占地していることは多少の別の意味をもつと考えることができる。また、隣接して貯蔵穴と土器窯が多数存在することも考慮する必要がある。

公州新影里遺跡では、貯蔵穴が密集分布するところの外廓に1棟だけが分布している。これは集落の調査の一部のみであったためと考えているが、詳細な検討が不可能な状況である。ただ、棟持柱地上建物が貯蔵空間に接していることは寛倉里と共通している。

比較的多い7棟の棟持柱建物が確認された湊沙里遺跡の場合、やはり混在する他の地上建物との同時性を認定するのは困難だが、住居群と一定の間隔を保って3棟あるいは4棟ごとに集まって群を成している。特に注目できるのはSB205号の場合、建物内部の地面に3基の土坑が一行に整然と配置されていることである。報告者はこの土坑の存在から、この遺構を地上建物というよりは地

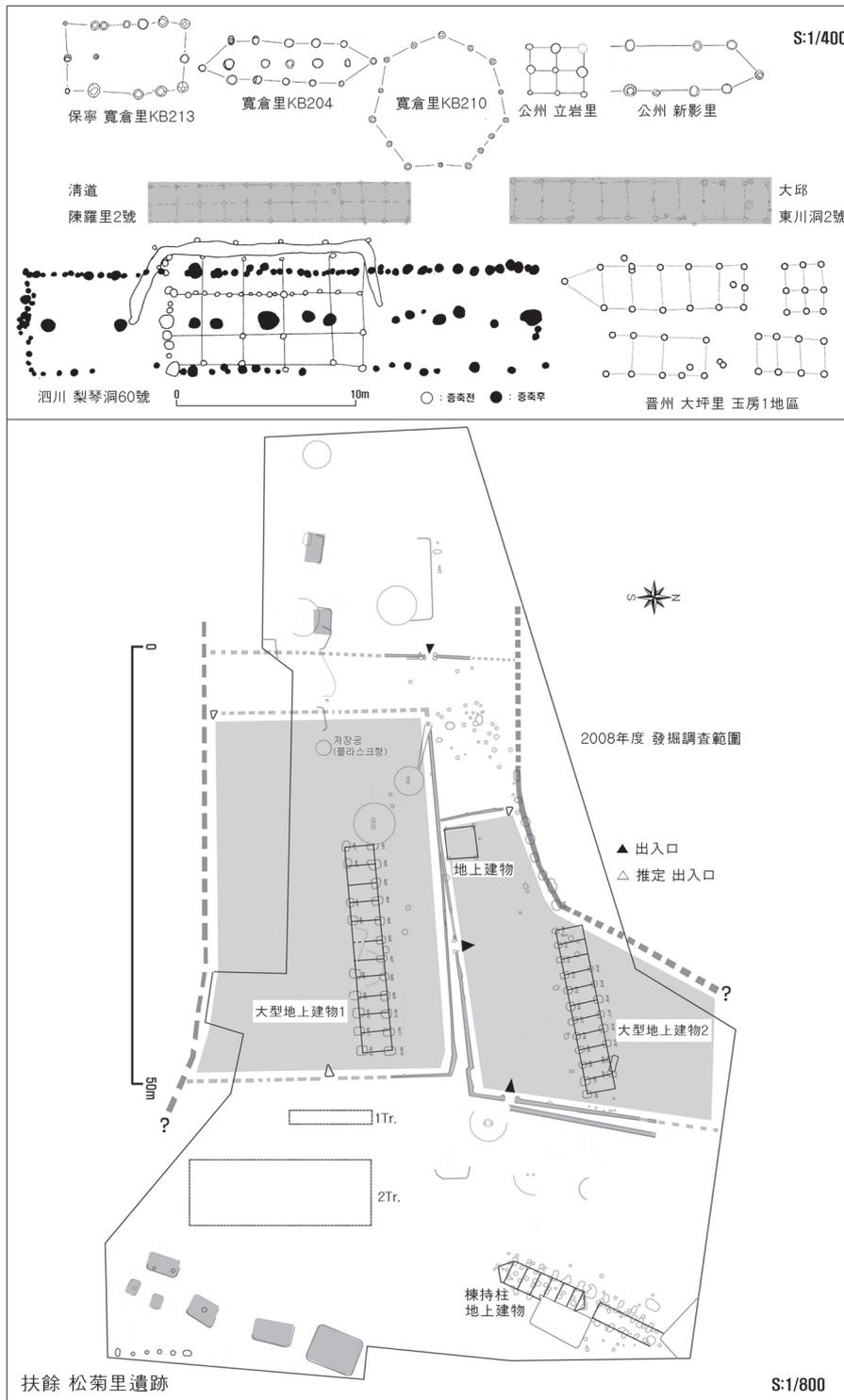


図7 韓半島の青銅器時代中期の地上建物(掘立柱建物)

面に設置した貯蔵施設物を保護するための構造物として把握した[尹世英・李弘鍾 1994:196]。しかし、筆者は日本の絵画土器などを根拠として、この遺構も高床倉庫である可能性が高いと考えているし、土坑は報告者の指摘のように貯蔵穴ともみえるので2つの機能を兼ねたと理解したい。

以上、棟持柱地上建物を祭殿と関連した祭祀遺構とみる日本の研究方法にしたがって検討してきたが、韓半島の場合は資料不足もあり分析対象とすることはまだ困難であることがわかった。特に、日本の研究成果を検討するうちにこの遺構が祭殿のような象徴性を兼ね備えているのかどうかを認定することはできなかったが、棟持柱地上建物がハシゴをもつ高床建物であり、さらに、穀物貯蔵に関連した倉庫として利用された可能性が高いことを確認した。また、漢沙里遺跡のSB205号の例からみて一部の独立棟持柱地上建物には高床倉庫と貯蔵穴の機能を兼ね備えていることもわかった。青銅器時代中期の寛倉里や新影里の例でも特定はできず、高床倉庫あるいは儀礼空間として利用されたと推定される。とにかく、地上建物は出土遺物から時期と比定することが難しく、性格の把握も難しいのが現実だが、形態・規模と関連した建築学的な側面をはじめ、集落内での位置関係、絵画資料、民俗事例などに注目して考える必要がある。

韓半島の考古学研究ではまり注目されてこなかった棟持柱建物は、日本との関連のなかでより深い研究が必要であることをここで強調しておく。

(2) 貯蔵穴

青銅器時代前期の住居内部に設置された貯蔵穴は、壺形あるいは深鉢形土器に穀物を貯蔵して、世代ごとに消費するための短期的な貯蔵施設である可能性が高い。しかし、中期になると屋内貯蔵孔はほとんどみられなくなり、住居の外により大きな貯蔵穴を造ることが一般的になる(図8-上)。住居外の貯蔵穴が群集して貯蔵空間をよくなるように、個別住居単位ではなく、住居群別あるいは集落単位で穀物が管理されるようになったことを示している。屋外貯蔵穴に何を貯蔵したのか、という点については、二つの異なる解釈が常存している。まず、貯蔵対象物を堅果類と根莖類に限定する考えである。孫峻鎬は堅果類を編物などに入れて貯蔵穴の内部に安置して蓋をしたとみている[孫峻鎬 2004]。そして、貯蔵穴の目的は冬の酷寒期に間に貯蔵対象物を凍結させないことにあり、翌年の春になって貯蔵物から芽が発芽する直前まで保管されたと推定している。簡単に言えば、松菊里文化の貯蔵穴を堅果類と根莖類の冬越し用の短期保管場所と考える説である。

これと異なるのが松菊里段階の屋外貯蔵穴を穀物貯蔵施設と考える金壯錫の説である[金壯錫 2008]。大規模な貯蔵穴群、とくに住居の数よりも貯蔵穴がはるかに多い貯蔵専門の遺跡として存在するという事実は、貯蔵用の堅穴が穀物の貯蔵用として主に利用された可能性を高めていること。仮に補助食料である非穀物の短期貯蔵用とした場合、住居地区から遠く離れたところに莫大な労力をかけて貯蔵専門施設を造ったとは考えにくいからである。

筆者は金壯錫の見解と同様に松菊里段階の貯蔵穴が穀物貯蔵に利用されたという立場で検討してみる。韓半島で屋外貯蔵穴に関心が持たれるようになったのは天安大興里遺跡の発掘を契機とする。当時、堅穴内部の土壌を対象としたプラントオパール分析をふまえて、貯蔵穴はイネを貯蔵する施設と考えられたことがある。韓半島の農耕文化と密接な関連がある弥生時代にも数多くの貯蔵穴が発掘されている事実も、このことと関連する。研究成果もやはり豊富な弥生研究を参考にする必要

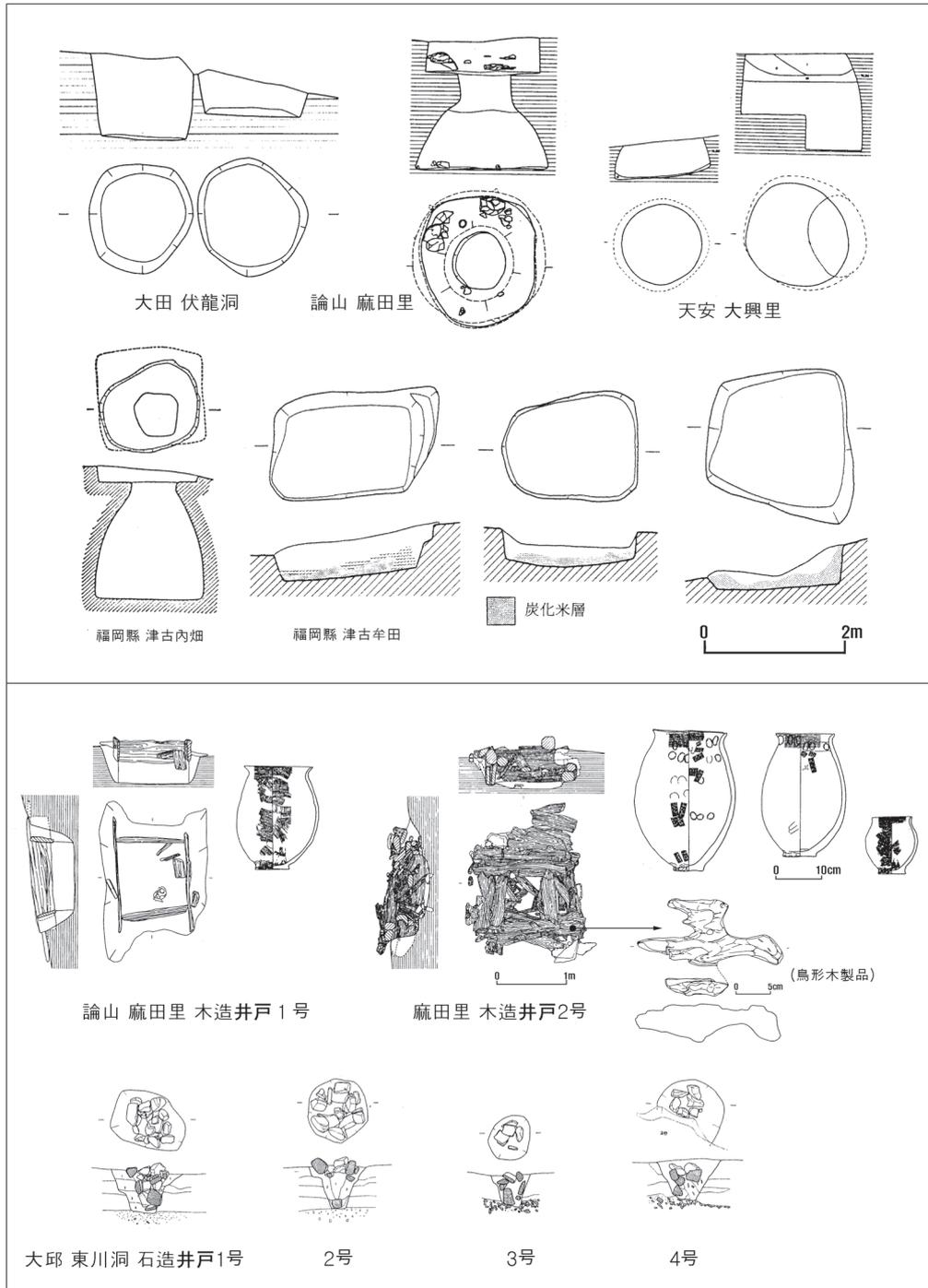


図8 韓半島と九州地域における貯蔵穴(上)と韓半島の井戸(下)

がある。弥生時代の貯蔵穴の貯蔵物としては出土状況からみてコメが圧倒的に多く、この他にアワ・キビ・ムギ・ヒエなども貯蔵の対象になったという。さらに、収納方法は直接的に収納する場合と、土器などの容器を用いる場合の2種類があると考えられている〔木下正史1997〕。日本では主に火に焼かれた炭化米の出土例が多い⁽⁹⁾。6世紀に書かれた中国の『齊民要術』には、貯蔵穴に五穀を貯蔵する時には、イネを焦がす焦麥法を実施した後に脱穀して収納すれば虫が湧かないという意義が書かれている。さらに、元代の農学者である王禎の『農書』には貯蔵穴の築造に関連して、堅穴内部を焼いて乾燥した後に使用したと書かれている。このように穀物を貯蔵穴に貯蔵すれば、災害が重なっても節約すれば5～6年は生きていけるとその効果が記述されている。これに関連して実際に、弥生時代の貯蔵穴は堅穴の壁に砂を混ぜた粘土を張って火を当てたことが確認されている。さらに、堅穴内壁が焼かれた例や、焼土が剥がれた事例も多いという⁽¹⁰⁾。中国では新石器時代に「灰坑」と称されるプラスチック形堅穴の穀物倉庫が出現して現在まで基本的な変化なしに続き、仰韶遺跡や半坡遺跡のプラスチック形堅穴からはコメ・ムギ・マメなどが発見されているという〔木下1997〕。

また、福岡市板付遺跡を分析した山崎純男は貯蔵穴を3つに分類している。1つは重要な種物を保管した貯蔵穴で環濠内部に位置する。2つ目は環濠外の日常的な作業場にある貯蔵穴で、日常的に消費するイネを含めた日常食料や道具類を貯蔵する。3つ目は墓地と同じ空間にある貯蔵穴で非日常的なものとの関連性を想定している。貯蔵穴の多様な機能を考えさせる見解として注目できる〔山崎2008〕。

以上のように貯蔵穴の機能は、中国や日本の考古学的成果を検討した結果から、穀物を保管した地下倉庫である可能性が高いと考える。貯蔵穴が冬越し用の短期保管用であるか、これよりもっと長期にわたって利用する長期保管用であるかどうかに関わらず、穀物を貯蔵するための倉庫施設であることを確認したことが重要である。

一方、貯蔵穴は高床倉庫と比較して機能や収納力の面では落ちるが、火災や掠奪行為から保存食料を守ることについてはより有利なので、非常用の食料貯蔵や食料の長期隠匿保管には適切であるという見解〔寺澤1991〕も注目する必要がある〔李亨源2009〕。

弥生前期前半から中葉にかけて福岡市板付遺跡、同有田遺跡78次調査などで袋状貯蔵穴をもつ集落が確認されているので〔小澤2006〕、韓半島の青銅器時代中期松菊里文化の集落構造と関連して両地域の影響関係を積極的に検討する必要があると考えられる。

(3) 井戸

井戸は集落を構成する施設の中でもかなり重要な位置を占める。飲用水をはじめ、さまざまな用途がある水の安定的な確保は、集落立地を決定する際のもっとも重要な要素なので、用水問題を解決しないと、集落は成り立たないためである。考古学的にはいつの時点から韓半島に定型化した井戸が登場して流行するようになったと考えられるのであろうか？ 山の谷や河川が汚染される前までは食水源の解決はあまり難しい問題ではなかったろう。当然の話だが、河川近辺が先史・古代人たちにとっては重要な集落立地であった理由の一つもここから探ることができる。とにかく、環境の変化に伴い集落の立地が多様化し、規模が大きくなって、井戸の問題が大きく浮上したと考えられる。このような重要性にも関わらず、青銅器時代の集落で井戸と認められる事例はかなり少ない。

筆者が知っているかぎり、忠南論山麻田里遺跡から木造井戸2基、慶北大邱東川洞遺跡から石造井戸4基が知られている程度である(図8-下)。三国時代になると石造あるいは木造の定型化した井戸が多く確認され、主に6~7世紀の資料が頻出する。もちろん、原三国時代の忠南牙山喝梅里遺跡や忠北鎮川松斗里遺跡、そして三国時代の百濟漢城期の風納土城から井戸が一部確認されたが、これもかなり例外的な場合である。このようなことから、青銅器時代中期に木造あるいは石造の井戸が初めて登場することは注目する必要がある。さらに低地台あるいは丘陵と平地が接する地点に立地する竪穴中の一部に井戸として使用された可能性が高いものがある。実に麻田里や東川洞遺跡の井戸も木材の枠組みや石が確認されなかったら、井戸として認められなかったかも知れない[李亨源 2009]。

弥生集落から確認される井戸も、韓半島の松菊里文化との関連性の中でその系譜関係を検討できると考えられる。さらに、前述した地上建物および貯蔵穴と合わせて対象としなければならない。

ただし日本列島で弥生時代早期に推定されている井戸は、江辻遺跡第5地点 SK-35 遺構が唯一のこと、これは規模が他の井戸よりも大きく、深さも浅いため疑問があるとする[久住愛子、久住猛雄 2008]。現在のところ、弥生前期から井戸が登場されると見る見方が多いようだが[堀大介 2008]、今後弥生早期のものが確認されることを期待してみる。

③……………集落構造からの視点

(1) 福岡市江辻遺跡と慶南馬山市網谷里遺跡

福岡県江辻遺跡は弥生時代早期を代表する集落の一つで、環濠と松菊里型住居が見つかったことから、韓半島と密接に関連した渡来系集団の集落としてよく引用されている。第1地点と第2・3地点は700m程度離れている。第1地点からは方形の松菊里型住居1棟と円形の松菊里型住居1棟が調査され、第2・3地点では環濠と住居、堀立柱建物が多数確認された。さらにその南に接した第5地点から住居1棟と墳墓群が発掘された。正式な発掘報告書が刊行されていないので、詳細な内容はわからないが、韓半島南部地域の様相からみて方形の松菊里型住居が位置した第1地点の方が先に造成された可能性が高い(図9)。

江辻遺跡は環濠集落⁽¹¹⁾として解釈する武末純一[武末 2002]と、これを否定する安在皓の見解[安在皓 2006]が対立しているが、多条に掘削された構状遺構が住居域の外郭を弧状に囲んでいるために環状の集落構造を呈していることがわかる⁽¹²⁾。住居空間には住居群と細長い高床倉庫、そして祭祀や集会などの多目的な公共の大型建物が配置され、南側から離れた別の空間に、東西に2つの群集をなす墓域が確認されている。墳墓群は土壙墓、木棺墓、甕棺墓で構成されている。武末によると、早期が主体である墓地群と前期初頭が主体の墓地群にわかれるという[武末 2002]。その反面、安在皓[2006]は墳墓の構造上の差異から東側のA群は渡来人系墳墓群で、西側のB群は縄文人系の在来人墓群として推定している。

馬山市網谷里遺跡は青銅器時代中期の松菊里類型段階の集落である(図10)。この遺跡の第2期には住居域を囲む環濠が掘られ、その外に石棺墓を主体とする墓域と地上建物群が位置する⁽¹³⁾。環濠

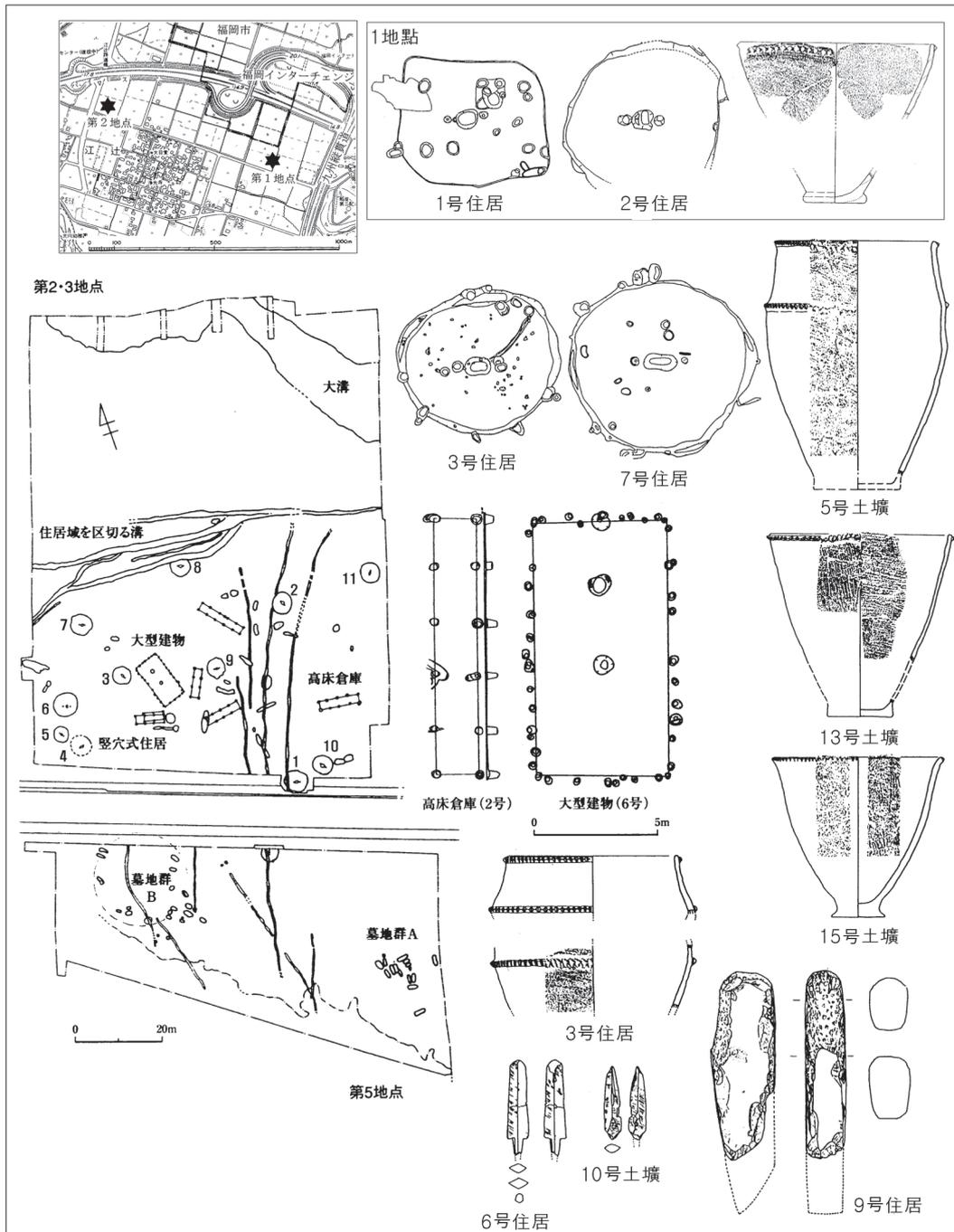


図9 弥生早期文化の江辻集落

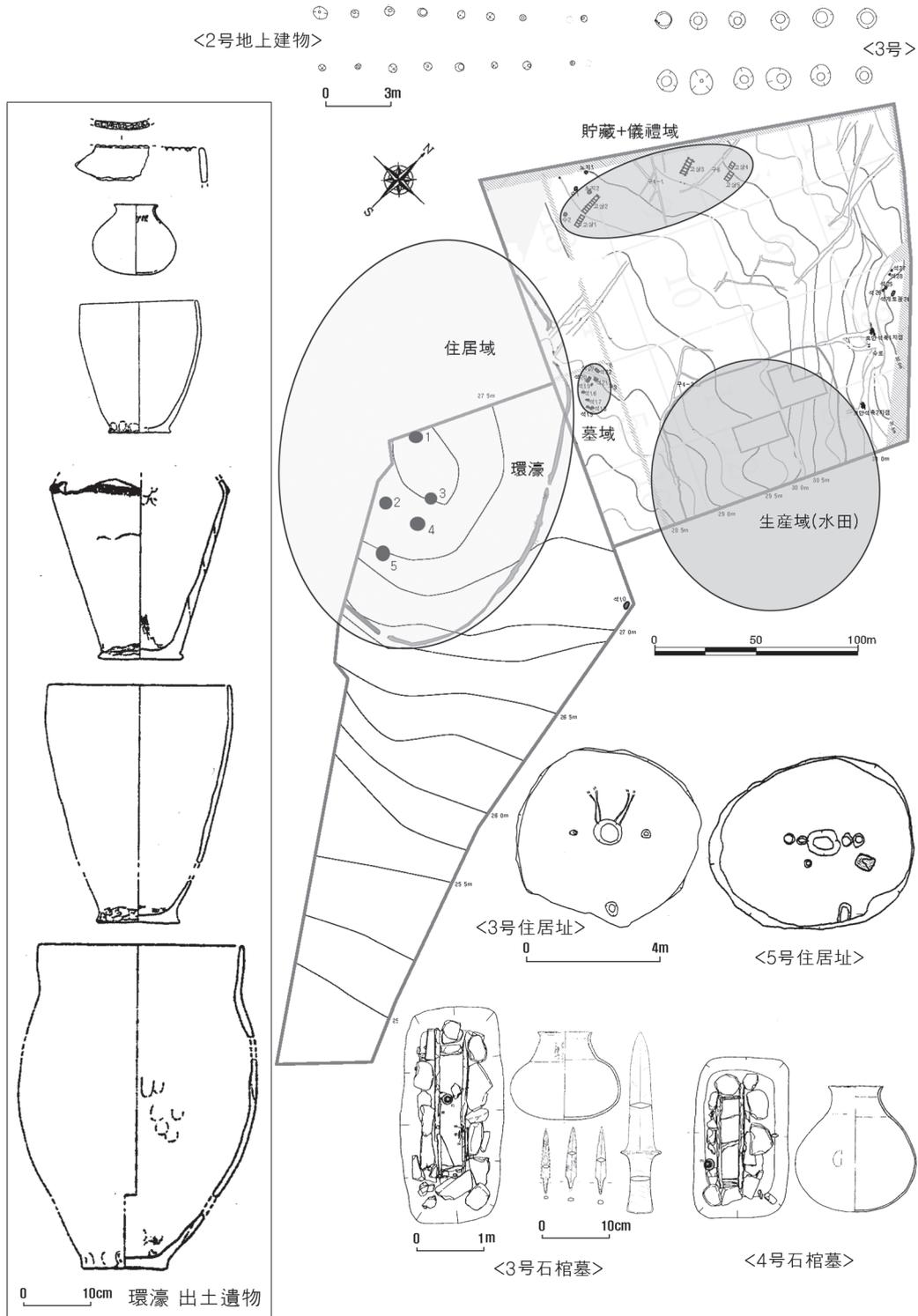


図10 青銅器文化中期の馬山 網谷里集落

の外側に墓域が位置するのは嶺南地域の環濠集落ではよくみることができる。

江辻集落と網谷里2段階集落は円形の松菊里型住居のみで住居域を形成することは完全に一致するが、集落構造という面から見ると共通点と相異点をもっている。共通点は住居域が環濠あるいは構状遺構の内部に位置して環状構造をなす点と、墓域が住居域とは離れて別の空間に立地する点⁽¹⁴⁾、そして、細長い地上建物群を構成要素として持っている点などである。相異点は地上建物群の位置関係と墓の構造が違うことなどである。

一方、網谷里集落の環濠から出土した突帯文土器のなかに、先述した九州西部系の屈曲型2条甕と形態が類似した土器があるが、内径接合などの製作技法や、胎土・色調などからみて、網谷里集落の青銅器人⁽¹⁵⁾が制作したものと判断した。おそらく網谷里の突帯文土器を制作した人は九州の弥生早期集落に一定の期間を滞在したか、あるいは韓半島南海岸と九州地域との交流の中で屈曲型2条甕を知っていたものであろう。もし、網谷里の突帯文土器の制作者が青銅器人ではなければ、九州の弥生人が網谷里集落に来てつくることもありえるが、土器の製作技法からみて可能性はかなり少ないと考えられる。

弥生早期の集落が良好な状態で発掘された例が少なく、正式報告書が刊行されていない段階で単位集落と集落間の詳しい比較が困難な状況であるが、上記した2つの遺跡の例からみられるような共通点と相異点を深く分析すれば、韓日の農耕集落の比較研究は相当進むと考えられる。また、弥生早期に韓半島の青銅器人が日本列島へ渡海したことを示す証拠が数多く明らかにされているが、網谷里の突帯文土器製作者のように再び故郷に戻ってきた青銅器人の存在も、重要な証拠の一つである。

(2) 集落構造と社会変化

弥生早期の貯蔵施設は江辻遺跡の地上建物である高床倉庫が代表例であり、糸島市(旧二丈町)上深江・小西遺跡、福岡市板付遺跡でも確認されている。弥生前期前半から中葉にかけての板付遺跡、有田遺跡78次調査などで袋状貯蔵穴が採用され始めたことが明らかにされている[小澤2006]。弥生集落における袋状貯蔵穴の出現時期を念頭において、韓半島の状況を見てみることにしよう。

青銅器時代中期の集落は住居空間、貯蔵空間、儀礼空間、墳墓空間、生産空間などで構成されていることが特徴で[李亨源2009]、貯蔵穴が密集分布する貯蔵域の大規模化は、農耕生産性の飛躍的な増大と関連した動きと考えられる。韓半島の中期集落構造、特に貯蔵空間を考慮すると、弥生前期から貯蔵穴が現れることをどのようにみるかは考えてみる必要がある。まず、1つ目は様々な考慮が要求されるが、韓半島から渡海した人々が彼らだけ、あるいは在地の縄文人と一緒に農耕集落を造成した初期段階は農耕生産性がかなり低い状態であったら、貯蔵穴が建てられる環境が形成されない可能性がある⁽¹⁶⁾。しかし、弥生早期から完成された形態の灌漑施設や水田が確認されることを考えると懐疑的であろう。2つ目は弥生早期遺跡で広範囲の調査が行われた集落がないため、その可能性を開いておくことである。これは現段階では検証が不可能である。3つ目は韓半島から袋状貯蔵穴が密集分布する集落が多数確認される地域は嶺南地域ではなく湖西地域であることから、湖西地域と北部九州との関連性を慎重に打診する試みも必要だと考えられる(図11-下、公州山儀里集落と論山麻田里集落を参照⁽¹⁷⁾)。

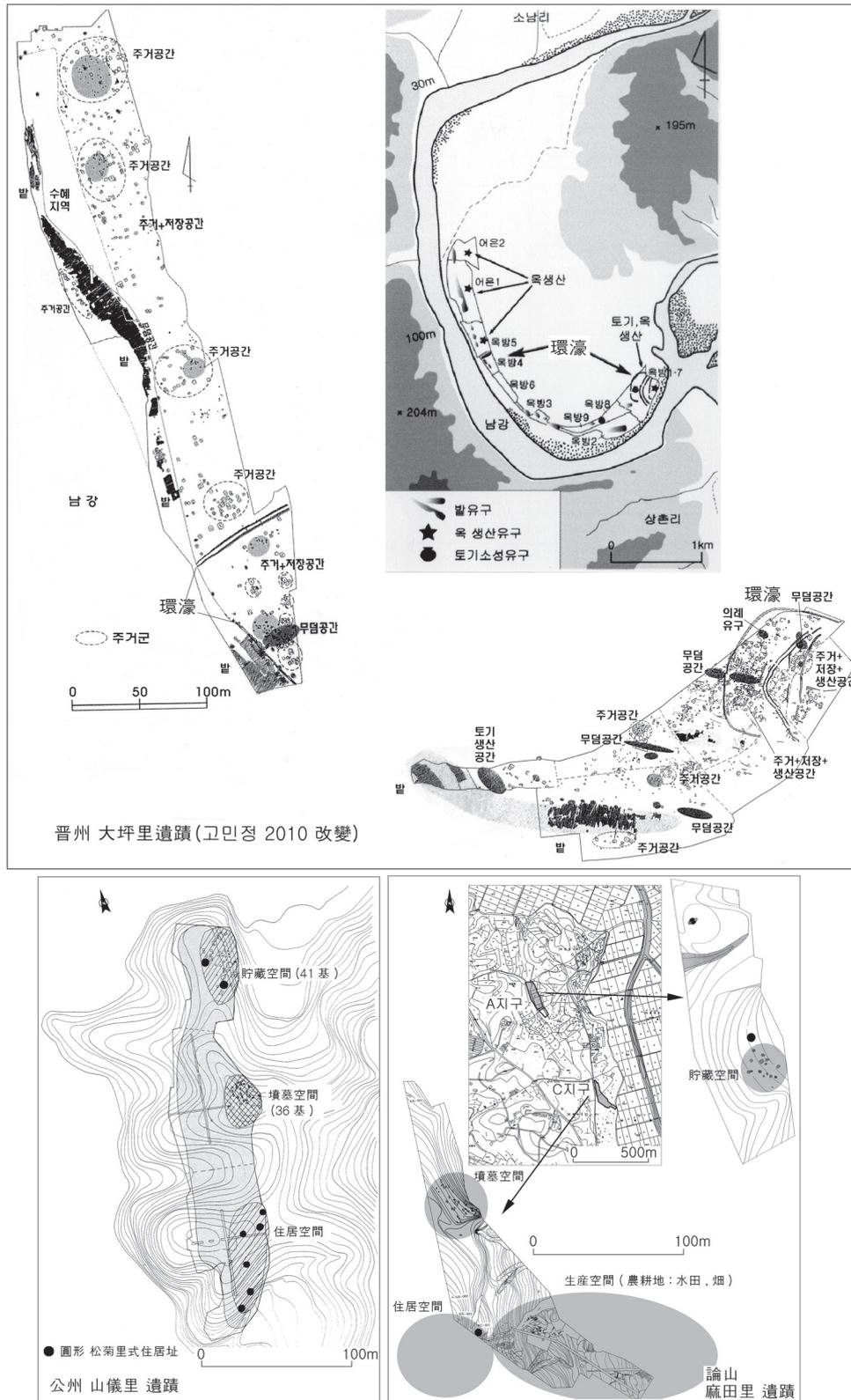
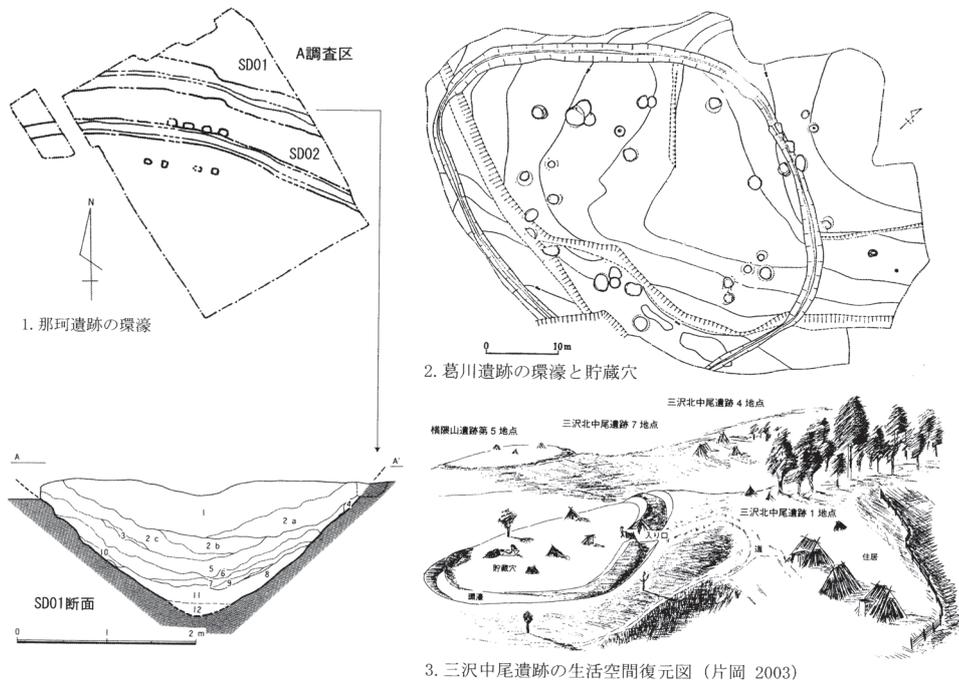
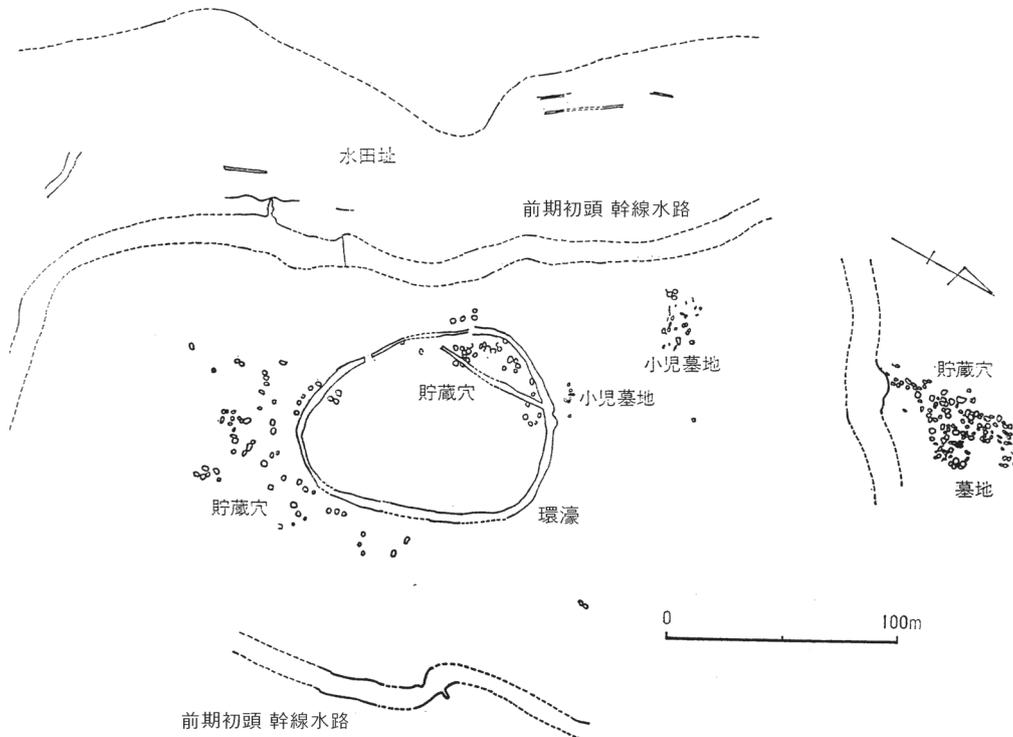


图 11 韓半島青銅器時代中期の環壕集落と貯藏穴が密集して分布する集落



<九州地域の弥生時代早-前期の環濠(中村大介2012)>



<板付遺跡の環濠(山崎純男1990)>

図 12 九州における弥生早期～前期の環濠

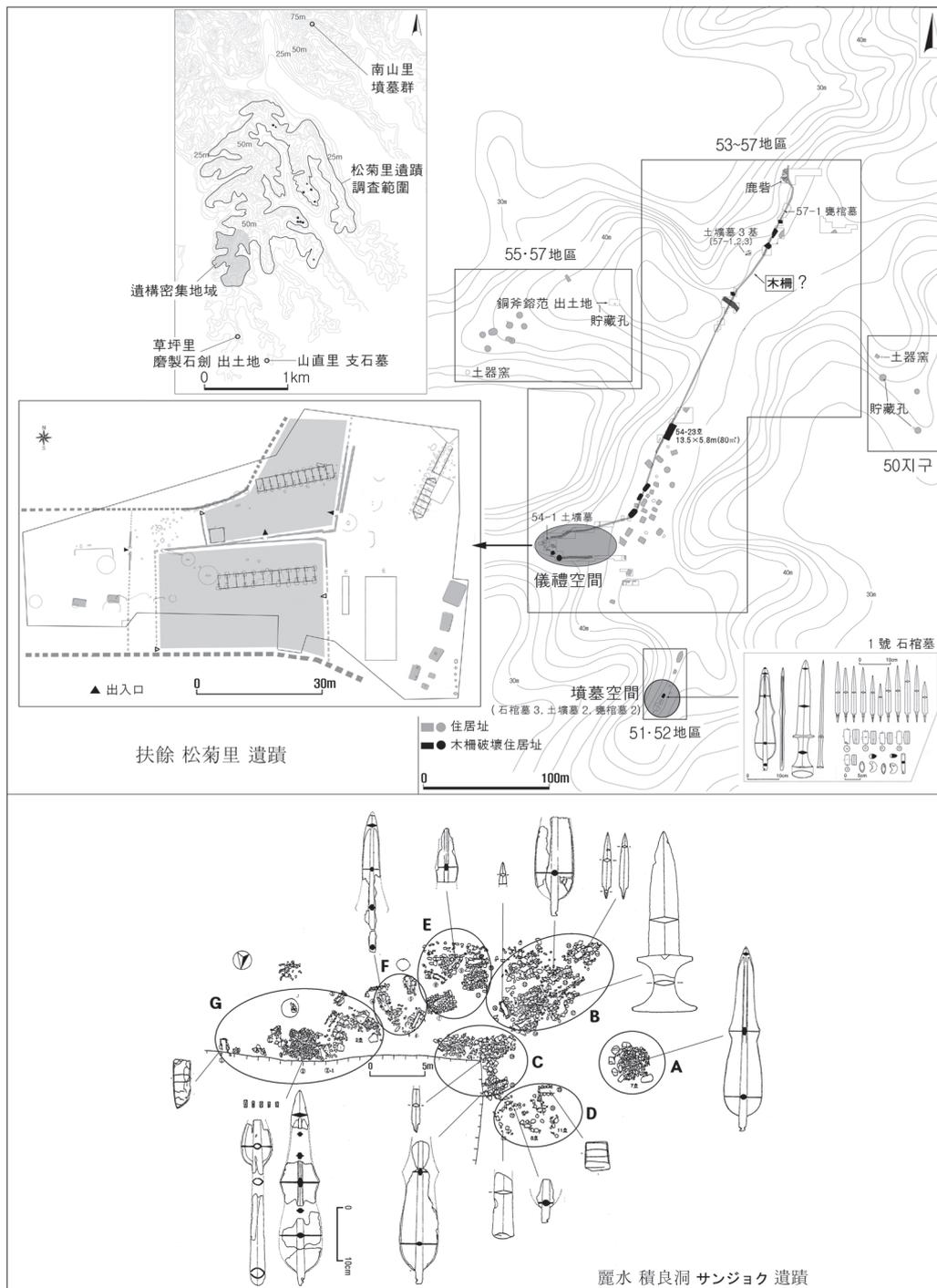


図13 韓半島の青銅器時代中期の中心的な集落の様相

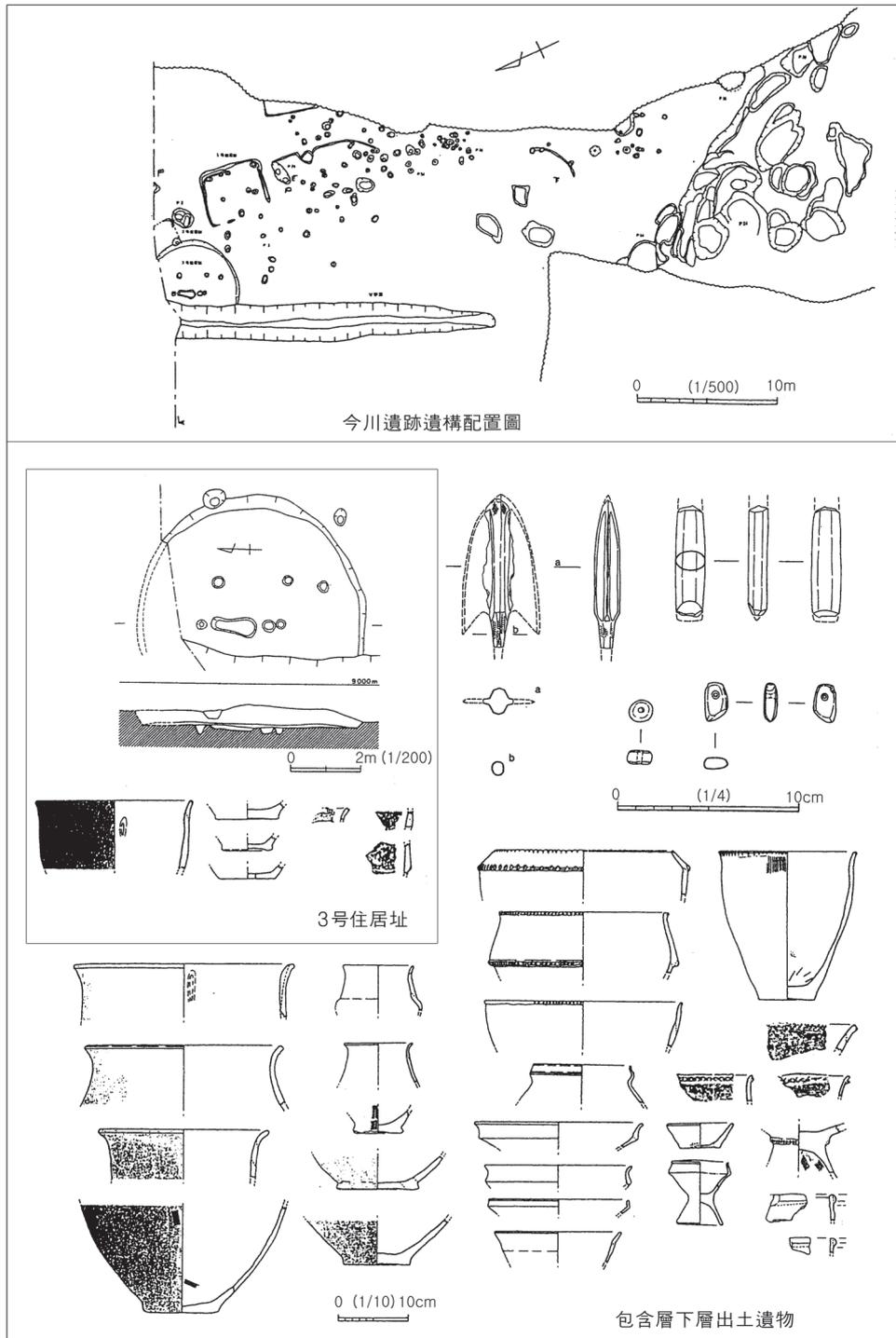


図 14 青銅器が出土した弥生最古の遺跡 今川遺跡

とにかく、弥生早期になかった貯蔵穴群が前期から造り始められるが、板付遺跡をはじめ、葛川遺跡のように貯蔵施設のみを囲む環濠が存在することは韓半島では確認されない現象である。これについて韓半島から伝来された環濠集落の変容として解釈する見解は注目できる [中村 2012]。

ここからは韓半島青銅器人の西日本への渡海と関連して少し言及してみよう。安在皓は環濠集落が嶺南南部地域に限定して発見されることは、この地域が他の地域よりも首長権がよく継承された社会であり、農業生産力も高く広い農耕地の確保と温暖な気候環境が上手く結びついていたためであったと考えている [安在皓 2009]。そして、韓半島の青銅器時代人が日本列島へ移住した原因は前期末に起こった集落間の階層化、あるいは支配従属関係のような葛藤と関連し、このような動揺は地域によっては中期後半まで続けられ、その余波として日本列島への集団渡海も継続的に起きるようになった。このような渡海の背景には社会情勢だけではなく、縄文晩期の激しい気候環境の悪化という気候環境の変化により新たな農耕地を目指して渡海したこともその要因としてみた [安在皓 2009]。

筆者も安在皓の見解に同義して次のような内容を補いたい。韓半島の青銅器時代前期後半から中期前半、つまり弥生文化の成立と関連した時期の社会は首長墓に該当する大型支石墓や区劃墓、あるいは首長の権威と権力を象徴する青銅器の存在などは弥生時代早期集落からは全く確認されない。これは韓半島で政治的に劣勢にいった集団らの渡海と連結されるものと考えられる。北部九州では前期初頭になってから福岡県今川遺跡 [橋口 1995, 埋蔵文化財研究会 2006] で確認されるように円形松菊里型住居址と共に包含層から有莖式両翼銅鏃と琵琶形銅剣の莖部を再利用した銅鏢などの青銅器が初めて確認され、これは前述した貯蔵穴群として現れる大規模の貯蔵団地の登場がこの時期と噛み合う点とも連結される。⁽¹⁸⁾ もちろん、この弥生前期集落の変化された発展様相は早期段階から持続された農耕社会の発展とも連結される反面、韓半島からこの時期にもう一回の強い社会的な余波が伝わった可能性も一緒に考慮すべきである。

おわりに

韓半島の青銅器文化と初期弥生文化の関係について突帯文土器と集落を中心に検討してきた。最後にその内容を要約しておわりとしたい。

① 突帯文土器は、その形態的な類似性から韓国の研究者たちは韓半島の青銅器人が西日本の突帯文土器の成立に深く関わったと考えてきた。しかし日本の研究者たちは両地域の突帯文土器の間にあまりにも年代差が大きいことや、畑作と水田稲作という生産基盤の違いが存在すること。縄文土器からの型式変化がスムーズにたどれることなどから、両者の関連を否定してきた。しかし今回、新たな資料をもとに再検討した結果、韓半島の突帯文土器文化は前期後半や前期末まで存続していた可能性が高まったことで、年代差がほとんどみられなくなったことが明らかになった。そもそも、突帯文土器文化は東アジア的な観点から考える必要があり、中国東北地域から韓半島の西北韓、東北韓地域、そして南部地域と日本列島に至る広範囲の地域で文化伝播が発生したという千羨幸の主張 [千羨幸 2008] を肯定的に認める必要があると考える。

② 集落を構成する要素のなかで、今まで学界が注目してこなかった棟持柱建物や貯蔵穴、井戸

を対象に、韓半島の青銅器文化と弥生文化との関係について検討した。慶南網谷里遺跡と福岡県江辻遺跡の集落構造にみられる共通性と相違点を検討した結果、網谷里出土の屈曲型二条甕の重要性が高まることになった。

③ 大規模な貯蔵穴群の出現時点とその理由を、青銅器中期文化と初期弥生文化を比較することで社会変化と結び付けて考えた。つまり、弥生早期の集落に貯蔵穴群が形成されなかったのは、初期の渡海集団の規模や社会経済的なレベル、あるいは階層がそれほど高くなかったことに求めた。弥生早期に巨大な支石墓や区画墓のような大規模の記念物や、首長の権威や権力を象徴する青銅器がみられない事実とも符合する。これは韓半島の首長社会の社会変化と気候環境の悪化に渡海の原因と背景を求めた最近の研究成果 [安在皓 2009] の正しさを裏付けている。

註

(1)——日本考古学では渡来人という用語を使用しているが、筆者は韓半島の立場からこの問題をみているので、海を渡って日本列島に行くという意味をもつ、渡海あるいは渡海人 [安在皓 2009] という用語を使用する。

(2)——突帯文土器は刻目突帯文土器を含む節状突帯文土器、無刻目突帯文土器を包括する意味として使用する。

(3)——韓半島と北部九州の併行関係と年代については、藤尾の弥生長期編年説 [藤尾 2009] を使用する。

(4)——藤尾が発表した2002年当時、韓半島の突帯文土器は青銅器時代早期の指標であって、前期まで存続するとは考えられていなかったため、韓半島の突帯文土器と九州北部の突帯文土器との間には、孔列文土器に相当する丸々一型式が空白になっていたこと。また当時の弥生短期編年のもとでは、韓半島の突帯文土器が終焉を迎える(孔列文土器が出現する)前11世紀と、西日本の突帯文土器が出現する(黒川式が終焉を迎える)前5世紀との間に500年もの空白が存在したこと。この2点から両者に直接的な関係はないと判断した [藤尾2002]。

(5)——この土器を韓国では「덧띠새김무늬토기」,「突帯刻目(文)土器」とも呼ぶ。筆者は突帯刻目(文)土器を支持するが、本稿では日本考古学で一般的な用例にしたがう。

(6)——九州島の屈曲型突帯文甕は、遠賀川以西系とよばれる九州西部の屈曲型甕と、遠賀川以東系とよばれる湾曲型甕の二つに大別できる [藤尾1990]。網谷里唐出土したのは、あきらかに遠賀川以西系の屈曲型甕である(藤尾教示)。

(7)——最近、藤尾は年代測定結果の蓄積により、両地域の突帯文土器の年代がかなり近づいたと理解している [藤尾2009]。すなわち、2900¹⁴C台の測定値をもつ突帯文土器が両地域に存在することが明らかになってきた

ことを受けたものである。ただし、西日本の突帯文土器で2900¹⁴C台の測定値をもつのは、前池式といわれている瀬戸内最古の突帯文土器であり、まだ水田稲作が行われていない段階に相当する。藤尾は以前、孔列文様をもつ縄文晩期末の土器が北九州市(たとえば石庵丁が見つかった貫川遺跡)から鹿児島県大隅半島に至る九州島の東海岸沿いに多くみられることを根拠に、孔列文土器に伴う畠作と、突帯文土器に伴う水田稲作は、韓半島における故地と伝播地域が異なる可能性を指摘したことがある [藤尾1993: 54-55頁]。今から考えると千羨幸の指摘は、藤尾の指摘につながってくる可能性がある。したがって、韓半島でもっとも新しい前期の突帯文土器と、炭素年代が2700¹⁴C台を示し水田稲作を行う山の寺・夜白I式との間には、依然として、100年以上の空白があることを考えると、欣岩里式畑作農耕の伝播と、先松菊里式水田稲作の伝播とは、分けて考えた方がよさそうである。

(8)——弥生時代の巨大な祭殿として知られている池上曾根遺跡の大型地上建物をもっとも代表的である。

(9)——弥生時代中期後半の福岡県津古牟田遺跡の貯蔵孔穴からは大量の炭化穀物が確認され、特に8号貯蔵穴の場合は24.1kgの炭化米が出土した [中島1995]。

(10)——大田伏龍洞遺跡の03-32号貯蔵穴の壁体からも20~30cm程度の赤色の焼土が確認された [中央文化財研究院2005]。

(11)——武末純一は環構と呼んでいる。

(12)——慶北大邱市東川洞遺跡にもこれと類似した構造がみられる。

(13)——網谷里遺跡は、環濠築造以前の1段階と環濠が機能中の2段階、環濠の南側部分を破壊して造成された墳墓群の3段階に分かれる。

(14)——縄文集落では居住空間内に墓を造成するが、弥

生時代の環濠集落は居住空間の外に墓を設置することで、死者と生者の日常的な接触を断たせたと考えられている〔武末 2002〕。韓半島南部の青銅器時代中期の社会も同じ様相である。

(15)——無文土器時代という名称を使用する場合は無文土器人が適切であるが、筆者は青銅器時代という名称を使用するので、韓半島の青銅器時代の人びとを青銅器人と称する。

(16)——もちろん、この場合は高床倉庫の存在も一緒に

考えるべきである。

(17)——南江流域の大坪里遺跡をはじめ、嶺南地域の青銅器時代の集落に袋状貯蔵穴の存在は確認できるが、湖西地域のように大規模に緊密に分布する遺跡を探しにくいことである。

(18)——弥生文化の金属器のうち、鉄器がはじめて出土するのは前期末～中期初頭（前4世紀）のことと考えられている〔春成 2003〕〔野島 2009〕。

引用・参考文献

< 韓国語 >

- 慶南発展研究院歴史文化センター 2009『馬山網谷里遺跡』
金 炳燮 2009「南韓地域早・前期無文土器編年と北韓地域との併行関係」（『韓国青銅器学報』4, 4-25）
金 壯錫 2008「松菊里段階貯蔵施設の社会経済的意味」（『韓国考古学報』67, 4-39）
端野晋平 2010「水作農耕開始前後韓日交流論の諸問題」（『嶺南考古学』52, 131-150）
朴 光烈・金 大徳・都 英娥 2006『慶州 金丈里遺蹟』聖林文化財研究院
朴 淳發 2003「羨沙里類型形成考」（『湖西考古学』9, 85-112）
孫 峻鎬 2004「錦江流域 松菊里文化の群集貯蔵孔研究」（『科技考古研究』10, 5-24）
新宅信久 1994「江辻遺跡の調査」（『九州考古学会・嶺南考古学会第1回合同考古学会資料編』, 118-135）
安 在皓 2000「韓国 農耕社会の成立」（『韓国考古学報』43, 41-46）
安 在皓 2006「日本 弥生 初期 農耕聚落の展開」（『嶺南考古学』39, 71-108）
尹 世英・李 弘鍾 1994『羨沙里』第5巻, 高麗大学校発掘調査団
吳 圭珍 2005『公州 新影里 여드나遺蹟』忠清文化財研究院
李 亨源 2001「可楽洞類型 新考察—錦江流域を中心に—」（『湖西考古学』4・5, 129-156）
李 亨源 2002『韓国青銅器時代前期中部地域無文土器編年研究』忠南大学校大学院考古学科 硕士学位论文論文
李 亨源 2009『青銅器時代 聚落構造と社会組織』書耕文化社
李 弘鍾 1988「日本初期水田農耕期の突帯刻目文土器—韓半島との関連を中心に—」（『史叢』33, 45-63）
李 弘鍾 2006「無文土器と弥生土器の実年代」（『韓国考古学報』60, 235-258）
李 弘鍾・姜 元杓・孫 峻鎬 2001『寛倉里遺蹟—B・G区域—』高麗大学校 埋蔵文化財研究所
趙 榮濟・宋 永鎮・鄭 智善 2011『四川本村里遺蹟』慶尙大学校博物館
中央文化財研究院 2005『大田伏龍洞遺蹟』
千 羨幸 2005「韓半島突帯文土器の形成と展開」（『韓国考古学報』57, 61-97）
千 羨幸 2009「無文土器時代韓日間地域関係変遷」（『古文化』73, 33-55）

< 日本語 >

- 新宅信久 1996「パズルの一片—弥生時代早期集落様相—」（『福岡考古』17, 9-20）
千 羨幸 2008「西日本における突帯文土器文化の成立過程」（『考古学雑誌』92-3, 52-88）
設楽博己 2009「独立棟持柱建物と祖霊祭祀」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集, 55-90）
庄田慎矢 2010「階段編年と重複編年—朝鮮半島南部青銅器時代前期における編年の秩序—」（『季刊考古学』113, 35-38）
端野晋平 2010「近年の無文土器研究からみた弥生早期」（『季刊考古学』113, 31-34）
橋口達也 1995「弥生文化開始期における東アジアの動向」（『弥生文化の成立—大変革の主体は「縄文人」だった—』角川選書, 12-23）
埋蔵文化財研究会 2006『弥生集落の成立と展開』第55回埋蔵文化財研究集會資料集
安 在皓 2009「松菊里文化成立期の嶺南社会と弥生文化」（『弥生時代の考古学2—弥生文化誕生—』同成社, 73-89）

- 中村大介 2012『弥生文化形成と東アジア社会』塙書房
- 山崎純男 1990「環濠集落の地域性—九州地方—」(『季刊考古学』31, 57-61)
- 山崎純男 2008『最古の農村—板付遺跡—』新泉社
- 深澤芳樹・庄田慎矢 2009「先松菊里式・松菊里式土器と夜臼式・板付式土器」(『弥生時代の考古学 2—弥生文化誕生—』同成社, 172-187)
- 小澤佳憲 2006「玄界灘沿岸地域の弥生時代前半期集落の様相—居住形態の変遷を中心に—」(『弥生集落の成立と展開』第55回埋蔵文化財研究集会発表要旨, 1-26, 埋蔵文化財研究会)
- 藤尾慎一郎 1990「西部九州の刻目突帯文土器」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第26集, 1-77)
- 藤尾慎一郎 1993「生業から見た縄文から弥生」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集, 1-66)
- 藤尾慎一郎 1999「福岡平野における弥生文化の成立過程—狩猟採集民と農耕民の相互関係—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第77集, 51-84)
- 藤尾慎一郎編 2001『弥生文化成立期の西日本・韓国の土器』考古学資料集19, 国立歴史民俗博物館
- 藤尾慎一郎 2002「朝鮮半島の「突帯文土器」」(『韓半島考古学論叢』89-124, すずさわ書店)
- 藤尾慎一郎 2009「縄文から弥生へ—弥生前史—」(『弥生時代の考古学 2—弥生文化誕生—』3-16, 同成社)
- 武末純一 2002『弥生の村』出川出版社
- 宮本長二郎 1991「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」(『弥生時代の掘立柱建物—本編』33-54, 埋蔵文化財研究会・第29回研究集会実行委員会)
- 宮本長二郎 1996『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
- 広瀬和雄 1998「弥生時代の「神殿」」(『日本古代史 都市と神殿の誕生』67-82, 新人物往來社)
- 大阪府立弥生文化博物館 2002『王の居館を探る』
- 都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 木下正史 1997「籾の貯蔵と収穫」(『弥生文化の研究 2—生業—』雄山閣, 69-83)
- 寺沢 薫 1991「収穫と貯蔵」(『古墳時代の研究 4—生産と流通 I—』雄山閣, 50-69)
- 小笠原好彦 1990「住居と倉と井戸」(『古墳時代の研究 2—集落と豪族居館—』雄山閣, 25-46)
- 佐原 真 1998「弥生時代に神殿はなかった」(『日本古代史—都市と神殿の誕生—』新人物往來社, 158-162)
- 清水真一 1997「大和における弥生—古墳前期の独立棟持柱付大型掘立柱建物について—」(『桜井市埋蔵文化財 1996年度 発掘調査報告書 1』(財)桜井市文化財協会)
- 中島達也 1995「津古牟田遺跡」(『東アジアの稲作起源と古代稲作文化』)
- 酒井仁夫 1980『今川遺跡』津屋崎町文化財調査報告書4
- 野島 永 2009『初期国家形成過程の鉄器文化』雄山閣
- 春成秀爾 2003「展望 弥生早・前期の鉄器問題」(『考古学研究』50-3, 11-17)
- 久住愛子・久住猛雄 2008「九州 I (福岡県)—福岡県下における弥生時代から古墳時代前期の井戸について—」『井戸再考—弥生時代から古墳時代前期を対象として—』第57回埋蔵文化財研究集会発表要旨集, 埋蔵文化財研究会, 19-84
- 堀 大介 2008「井戸の総論と諸問題」『井戸再考—弥生時代から古墳時代前期を対象として—』第57回埋蔵文化財研究集会発表要旨集, 埋蔵文化財研究会, 1-7

(韓国・韓神大学校博物館, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2012年12月7日受付, 2013年3月26日審査終了)

Relationship between the Early Bronze Culture of the Korean Peninsula and the Early Yayoi Culture: From the Viewpoints of Tottaimon Pottery and Settlements

Yi Hyungwon

This article examines the relationship between the bronze culture of the Korean Peninsula and the early Yayoi culture from the viewpoints of tottaimon pottery (clay band pottery) and settlements.

A review and examination of recently excavated materials reveals a high possibility that tottaimon pottery of the Korean Peninsula may have continuously existed from the Initial Bronze Age to the latter half (end) of the Early Bronze Age. As a result, the age gap of tottaimon pottery between the Korean Peninsula and the Japanese Islands has almost disappeared. Therefore, the tottaimon pottery culture should be examined as the culture of the whole East Asia, and cultures related to tottaimon pottery should be assumed to have spread in a wide range from the Chinese Northeast region to the Korean Peninsula (the Northwest Korea, Northeast Korea, and Southern region) and the Japanese Islands.

Among the elements composing a settlement, constructions on the ground have gotten little attention thus far. However, a study on those constructions such as buildings with munamochi-bashira (roof supporting pillars), storage holes, and wells in the Korean Peninsula and the Japanese Islands indicates a close connection between the Korean bronze culture and the Yayoi culture.

With regard to the structure of settlements, another study was conducted to examine common and different points of the Manggok-ri site in the southern Korean Peninsula and the Etsuji site in the northern Kyusyu Island. The study gave special attention to the meaning of northern Kyushu-style tottaimon pottery unearthed at the Manggok-ri site. The research results reveal that social changes were one of reasons why groups of large-scale storage holes appeared in the middle bronze culture. Exploring reasons why they appeared a little later in the early Yayoi culture, the results also suggest that it was because the early immigrant groups who spread rice cultivation were very small in number and only reached lower socioeconomic levels or status. For the same reason, there were neither huge memorials such as dolmens and sectional graves nor bronze objects as symbols of power and authority of leaders in the Initial Yayoi period. These results are also consistent with other research results that the immigration was attributed to changes in the situation of chiefdom societies and the deterioration of the climate and environment in the Korean Peninsula.

Key words: tottaimon pottery (clay band pottery), Settlements, Bronze Age, Yayoi period, Overseas immigrants, Chinese and Korean immigrants
